

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が良好であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

ドル/円相場のトレード戦略

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのかが注目されることになるでしょう。

目先は明確なファンダメンタルズの変化が起きることは期待しにくく、米国の貿易交渉の行方が不透明なこともあり神経質な動きが予想されます。

レンジ的には、2017 年、2018 年の年前半の下落幅はほぼ 10 円で、現状でも昨年の高値からほぼ 10 円の調整を行っており、またポジション調整も進んだものとみられることから一段の大幅ドル安には向かわないものと考え、当面は 105 円～110 円程度のレンジ相場となりそうです。

■短期展望

先週は、108 円半ばでスタートした後、108 円を一時割り込む局面もあったものの、ドルは底堅く推移し、ムニューシン財務長官が対中制裁関税の税率引き下げを検討していると報道もあり米中通商摩擦緩和期待から週末には 109 円後半まで上昇して週を越えています。

今週もドルの下値は堅い動きが期待され 110 円台回復の可能性が高まっています。ただし、低迷する米長期金利や米国経済成長鈍化念などドルの上値を抑える要因もあり、110 円を超えても足場固めまでは難しいように思われます。

下値に関しては、107 円台は既に買い場との見方が強まっていることから、今週は 107 円半ばから 110 円半ばのレンジが想定されます。